

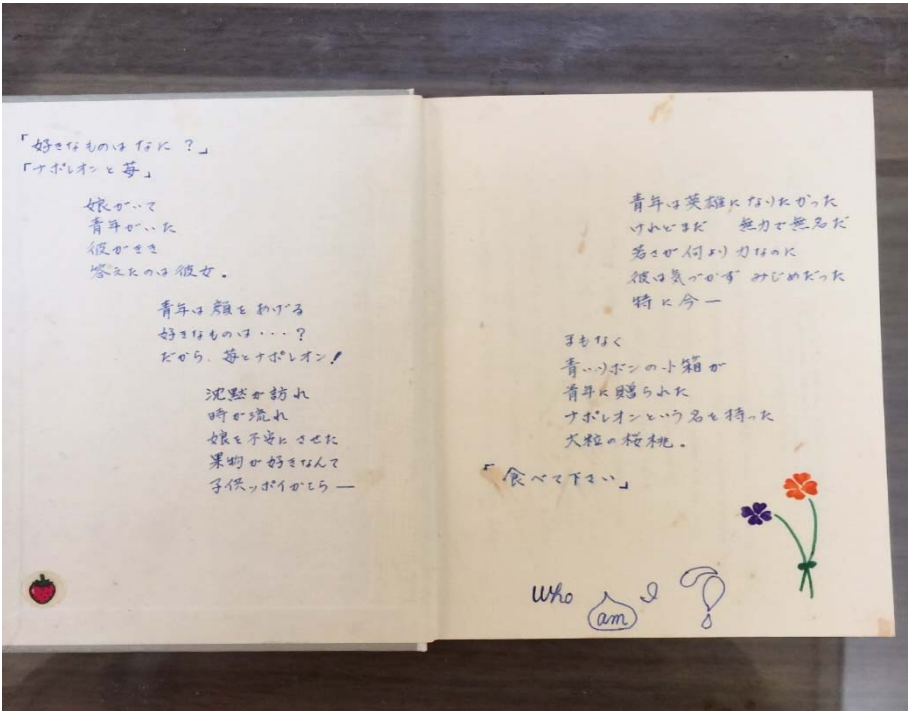
ナポレオンといちご



僕が大学一年生に上がるまで、我が家では、家族そろって仏壇に向かい、お経を上げるという田舎まがいの古風な習慣がありました。中止になったのは、確か、親父が心筋梗塞で倒れて以降だったと思います。

ある時、お経を読んだその後で、弟が、「兄貴の読経は、つるつるの声だ。声だけ良くて有難味がない。ちょっと恥ずかしいかな」

と、高校生とは思えないほど落ち着き払った声で、高段におわします大僧正様のように宣った(のたまった)のです。ぼくは、心の中で思いっきり後ろにのけぞりましたが



「好きなものはなに？」
「ナポレオンと母」

娘がいて
青年がいた
彼がさき
答えたのは彼女。

青年は顔をおける
好きなものは...?
だから、毎々ナポレオン!

沈黙を訪れ
時が流れ
娘と不安にさせた
果物も好きなんて
子供っぽいからー

青年は英雄になりたかった
けれど、無力で無名だ
若こそ何れも力強いの
彼は気がおすおじめだった
特に今一

まあなく
青い箱のナポレオン
青年は贈らした
ナポレオンという名を持つ
大粒の桜桃。

「食べて下さい」

Who am I?



「そうかもしれない」とこちらも、真つ向唐竹割りの真剣を白羽取りしたぞとばかり、平静を装いました。何せ相手は、漱石先生に師事して、「則天去私」、つまり、わたくしを捨てて、天の運びに則って(のつとつて)動く、の域に達しようという御仁ですから、そういう人間に楯を突いてもかないつこありません。そこまでで精一杯です。後は、無言、沈黙、奇妙な間。

とにかく周りは偉い人だらけで本当に困りました。

親父からは「情けないヤツだ」と言われ、弟からは前述のごとく「恥ずかしいヤツだ」と言われ、妹からは「お兄ちゃんだけ、兄弟じゃないみたい」と言われ、お袋は何も言わず、庇いもせず。あるいはまた、たまに訪れる親戚の叔母さんからは、「かずちゃんは、ちよつと陰気なところがある」とまで。

それはそうです。陰気にもなります。だって、毎日偉い人々に囲まれて、日々へこまされていたんですから、自信も元気もなくなるというものです。

しかし、それでも、いつかは見ておれ、そのうち大作家になって鼻の穴を開かしてやるからと、大きな望みを抱きましたが、悲しいかな、願望と実態の間には、大きな隔たりがあり、実態の方は、しゃかりきになってペダルを漕ぐんですが、その力が一向に願望という車輪には伝わらず、結果、疲れといらだちが増すばかりで、力の伝わらない自転車は走ると坂を後ろに下るばかりでした。

ですが、弟とは意見が合うこともありました。この「則天去私」の御仁は、何故か「これが青春だ!」とか、たしか「夕日ヶ丘の総理大臣」?だとか、夏木陽介や中村雅俊やレツツビギン!とにかく何か始めよう!の村野武範の青春ものが大好きで、更にまた、19歳でデビュー仕立ての名取裕子の「おゆき」という朝の連続ドラマで、おゆきがそれまでのなんともいえない穏やかでのほほん顔から突然夜叉般若の顔に変化(へんげ)したのでみて、「出来るヤツ!」と一声言った後、続けて「これはいい女だ!おいしそうだ」といったことでも意見が一致したりしました。

そうこうしているうちに、僕はある事情から、大学に登校できなくなり、弟はよもやの滑り止めも落つこちて浪人生になり、お互い悶々とする日々を送ることになったのです。時に僕は20歳、弟は18歳でした。

今思えば、親父とお袋は、同時に問題学生を二人抱えることになって、心中穏やかではなかったと思います。それは自分がふたりの息子を持つ身になって初めて分かりました。



大学のキャンパスに行くことが出来なくなって、時間ばかりが余ってしまったので、地の大きな書店でアルバイトを始めました。

そこである女の子と知り合ったのです。実はその前、それはそれはすてきなお嬢さんに恋をして、必死の努力もむなしく、はかない結末を迎えてしまった直後だったので、ほかの女の子が全くカボチャかジャガイモにしか見えず、まるで目に入らなかったのですが、先行きが全く何も見えていず、確たる自信もない僕の、一体どこがいいのかさっぱり分からないまま、その子の強いアプローチに根負けしておつきあいをするようになりました。

正直、第一印象は、学生の割にはすこし派手。お化粧は濃いし、ちよつとボディーコンシャス過ぎるし、なんとなく男出入りが多そうだしと、それはそれはすてきなお嬢さんとは正反対のタイプだったので、戸惑ったのかもしれませんが。それであるとき、誠に大きなお世話だとは思うけれど、いささか控えめにした方がいいような気もするんだが、と感想を述べると、なんと翌日から、さっぱりばつさり「けばさもどき」を取り払ってお店へアルバイトに来たのです。えーつ、マジ？ちよつとやばいかも、と思ったのですが、涙とプレゼントと並外れたひとなつこさに負けてしまいました。その子のひとなつこさは、お父さん子でもあり、お兄ちゃん子でもあったからのようでした。

しかし、ためらいながらも付き合ってみると、信じられないくらい献身的で、さみしがり屋で、甘えん坊なところがありました。また、僕が翻訳したロシア語の童話を清書し、それに自分で絵をつけて絵本みたいなものを作ったり、自分の文字とイラストでノートに書いた僕とその子をなぞらえた手作りの寓話「ナポレオンと苺」を送ってくれたりする、芸才もある子でした。「ありがとう」という言葉が、滅多にないこと、あり得ないことをしてくれましたので、「有り難し」転じて「ありがとう」になったのだと教えてくれたのもその子でした。

その子の目にはぼくはこう映っているようでした。
「好きなものはなに？」

「ナポレオンと苺」

娘がいて

青年がいた

彼がきき

答えたのは彼女

青年は顔をあげる

好きなものは・・・？

だから、苺とナポレオン！

沈黙が訪れ

時が流れ

娘を不安にさせた

果物が好きなんて

子供っぽいかしらー

青年は英雄になりたかった

けれどまだ 無力で無名だ

若さが何よりの力なのに

彼はきづかず みじめだった

特に今ー

まもなく

青いリボンの小箱が

青年に贈られた

ナポレオンという名を持った

大粒の桜桃

「食べて下さい」

その後、僕はアルバイトでためたお金で、ロシア語の勉強やどうしても一度大陸を見てみたい、異国の地をこの足で踏んでみたい、そうして向こうで何か大きなものをつかみたいという思いが募り、当時のソビエトに一ヶ月間、短期語学留学をすることをその子に告げました。その子は、はじめ何も言わなかったのですが、そのうち出発までの残りの日を辛そうに数えるようになり、あるときには、

「行ったら、もう帰ってこないような気がするの。手の届かないところへ行っちゃうような。わたしの方を見てくれなくなるような気が・・・」

僕は少し返事に困りました。当時、野心満々だったぼくは、確かにそういうことが起きるかもしれないと思いましたが、さすがにそれはいえませんでした。

ところが、僕ら短期留学生を乗せたロシア船ナホトカ号が横浜の栈橋から大陸の東岸の窓口であるナホトカに向けて徐々に岸壁を離れ、次第に速度を上げていくその後を、泣きながら手を振って、どこまでも、どこまでも栈橋の突端ぎりぎりまで追いかけてくるその姿を目の当たりにして、頭の中の野心がみるみるうちに薄らぎ、すてきなお嬢さんが瞬間蒸発したのです。そうして、出帆したばかりなのに、早く帰ってあげたい、一刻も早く帰りたいと強く思ったのです。

後で思ったことですが、その子は僕の中に亡くなったお父さんの影を見ていたのです。僕ではなくて、素敵だったのに早逝したおとうさんの代役を。そのため、その後に様々なことが起きることになるのですが、そのときはそんなことは知るよしありませんでした。

実はこの「美しい青春の一齣」は、その後続く地獄のほんの一里塚に過ぎなかったのです。



ロシアでの一ヶ月間に及ぶセミナーハウスでの勉強と、街へ出での語学の腕試しや物見遊山を終え、帰国してからおつきあいは急速に深まりはじめました。

何でそんなにいろいろ才能があるのにいわゆる「三流短大」に行かざるを得なくなったやむを得ない理由も分かりました。また、こちらから訊いた訳ではないんですが、前におつきあいでいたひとと、お別れした理由も無理からぬことかもしれないと思いますが、女の人とはカッコや面白さだけを見ているわけではないのだとも知りました。更にその頃増えていた抜け毛を気にしている僕に、禿げたら私の髪の毛でカツラを作ってあげるから大丈夫だよ、と言われて泣きそうになったこともありました。あと、それとお父さんがどんなに素敵だったかと言うことも。そんな風にしてその子のことを次第に知るうちに仲はだんだん親密になり、とても楽しい日々が続きました。アルバイトで稼いだお金であちこち旅行をし、その子の部屋に泊まるようにもなりました。

ところが、それから1年ほど経ったあるとき、その子のお母さんに再婚話が降っておいってきたのです。その子はとても動揺しました。ところがあつちに飛び、こっちに飛び、泣いたり怒り出したりして不安定きわまりなくなりました。あのお父さんを裏切って、あのお父さんのことを忘れて、頭のはげ上がった、歯の黄ばんだ親父と結婚するなんて許せな

い。お父さんがかわいそうだ。その結婚を認めることは、自分もおとうさんを裏切ることになる。だから絶対認めないし、自分もその軍門には降らない（くだらない）、という感じでした。

その目をすこしほかに転じて貰いたくて、僕はその子を家に招待し、両親に合わせようと思い立ちました。結婚を前提にというわけではないんですが、そんなことをするくらい大切に思っているのだよと言うことを示したかったです。心配している人間が横にいるよということも思い起こしてほしかったのです。

ところが、そのことを事前に親に話していたにもかかわらず、両親は来たときも、帰るときも一度も顔を出さず、お邪魔しますにも、お邪魔しましたにも何の返答もしなかったのです。おそらく、親父がそう指示をして、お袋がいつも通り黙って従ったのだと思います。

しかしその子はそのことについて何も言いませんでした。それがかえってつらく、ころの中で何度も謝りました。

そんな折、ロシア語の通訳のアルバイトのテストに受かり、1週間ほど、富士の裾野の街にあるエアコン製造工場に住み込みで行くことになったのですが、アジア系ロシア人の通訳がいて、それとは比較にならないほど自分の通訳としての実力がお粗末なことがすぐに分かり、行って二日後に辞表を出して、東京に戻ることにしました。来るときはその裾野の街にある駅まで、その子が電車に乗ってついてきてくれたので、一刻も早くその子のアパートに行つて驚かせてあげようと階段を上って、部屋のドアを開けて、愕然としました。男の人が部屋の奥に居たのです。僕も驚きましたが、彼女もたいそう驚いたようです。なんで、居るの？と。

「ごめんなさい。ちよつと外に出てて」

そう言われて外に出ましたが、暫くしてその男の人は帰っていきました。

その後、その子は、

「私をぶって！思いつきりぶって！そうしないと糸が切れた風みたいにとっか行っちゃいそうなの。怖いので、どこへいっちゃうか・・・」

ぼくは大丈夫、大丈夫、どこにも行かせないからとその子の背中をさすりました。何故か、抱きしめるのがはばかられたのです。よく分かりません。

そうして、何か「癒やしの薬」でもすり込むように、ゆつくりと背中をさすったんですが、背中をさする度に、掌（てのひら）がブラジャーのホックに当たってさすりにくいな、なんかいまいちダイレクトに薬効が届いていない気がするな、とへんなことを思ったのを妙にはつきり覚えています。

しかし、その翌日からその子は、アパートから姿を消してしまいました。

その子のアパートの前で、帰りを待ち続けました。今思えばよく、近所の人に不審者として警察に通報されなかったものだと不思議です。

さすがに疲れて家にもどったのですが、戻ると親父が「不登校学生の分際で何を女に狂ってんだ、目を覚ませ！たわけ者が！」と一喝され、それでも飛び出そうとすると、心筋梗塞を患った後の親父が胸を押さえて苦しみだしたと、お袋が言いすがって「それでもかずちゃん、行こうとするの？」と言ったものですから、さすがにそれ以上は先に行けず、ただただ家の中で、その子の帰りを待つしかありませんでした。

別の男の人に抱かれている妄想が、時々刻々僕を苦しめました。「焼き餅」です。その子の裏切りに対する強烈な怒りや憎しみや、手の中に何も無いむなしさやさみしさが何度も何度もおそってきて、殆ど半狂乱みたいな状態でした。

男は女が相手に身体を奪われることに嫉妬し、女は男が相手にこころを奪われることに嫉妬する、と何かで読んだことを思い出したりしました。女の人の気持ちは実感できませんでしたが、男の人の方の気持ちは痛いほど分かりました。

「ちくしょー、ちくしょー、この野郎、この女（あま）！！」という感じでした。気づかれずに踏みつけられて、苦し紛れに身体を右へ、左へ「くの字」「逆くの字」に何度も折って、路上の上で激しくのたうち回るミミズみたいになっているぼくに、家では僕より大きな部屋で受験勉強をしていた弟が出てきて、

「兄貴、おなごは魔物じゃ。則天去私、則天去私」といいました。

同じ「そくてんきよし」はきよしでも、僕の方は「即転虚死」のほうのきよしでした。すってん転ろりんして、虚しく（むなしく）死んでいるような状態だったのです。



それから数ヶ月が経ちました。その子から突然、電話がかかってきました。当時は携帯電話など無論なく、家人の誰にとられるか分からない電話は、かなり危険だったので、幸いそのときは僕一人でした。

求めに応じて、その子と外で会いました。聞くと、アパートを飛び出した後、別の男の人に拾われて、一緒に居るようになったこと。大きな病気をして、苦しんでいたときに、

その人が真剣に看病してくれて、一緒に住むようになり、今も一緒に住んでいると言うことなどを聞きました。

「で、どうしようと？」と聞くと、「どうしているかなと思って・・・」とだけ言われました。そして「あのとき、思いっきりぶっつけていたら、ちがったかもしれないかなって・・・」。しかし、その先はありませんでした。何かを期待しましたが、こちらからは何も言い出せませんでした。

それは、おそらく外に出て、あちこち回って経験をし、ぼくがおとうさんの代役ではないこと、そうして、そんな遺影をいつまで追いかけても仕方がないことに気づいたのかもしれないな、簡単に言うとは熱が覚めたということかなと。

もう戻らないだろうなという読みからでしたが、そういうふうには、努めて冷静に考えようとする一方で、心臓は僕の頭を裏切って、どつくんどつくん、鳴り続けていました。

「じゃあ、もう会うこともないと思うけれど、元気でね」といつてお別れしようとした。

「いや、ちよつと待って！やっぱ戻ってもいい？」と後ろから声を懸けられるのを、心底期待しましたが、それはありませんでした。振り返ると、もうその姿はなかったのです。

後日、その子のお母さんがお詫びの手紙を送ってよこしました。おかあさんとは上京した折、何度か会って、持ってきたお手製のおいなりさんを一緒に食べたりしてとても仲が良かったのです。

割と気に入られていたようです。その子は僕のそんなところも好きだったみたいです。で、そのお母さんが、手紙の中で、

「娘があなたのことを裏切るようなまねをして誠に申し訳ありません。親として教育者としてお詫びのしようありません」と述べ、目の前にその姿が見えるような感じでした。おかあさんは元学校の先生だったのです。そして、お父さんも。

おかあさんは明るくてとてもきちんとした人でした。しかし、やはりひとりの生身の女性でしたから、田舎で一人寂しくもあつたわけです。

それで、この手紙に対して僕は、
「誰が悪いわけでもありません。お母様はもちろん娘さんも。」

娘さんがあるとき本気だったのは嘘ではないのです。あときは本気だった。それは真実。でも、人の心は変わります。変わるのが真実、実態なのだと思います。「変化こそが正しい」のだと思います。これはやむを得ないこと。仕方のないことです。それが分かっただけでも、良かったのかもしれない。誰も恨んでいないので、心配いりませんよ」それは、まず自分にそう言い聞かせただけでした。そしてそういう美しく高みに立った言葉は吐かないと、「やっていられなかった」のです。切り抜けられなかったのです。

しかし、僕はそれを幻と気づかず、見誤ってしまいました。必ずしもそういう言葉を吐いたからと言って、実態がそうなのとは限らないのです。そういうご大層な衣をまと

って、やせてミジメで疲れ切った自分自身を人目から隠したかっただけなのです。本当は。

僕はそれを取り違えてしまいました。それがその後続く何十年という苦しみの元になりました。

自分自身がやったにもかかわらず、自らが施したそのすり替えや自分を偽る巧妙なマジックに自分自身がだまされたことに全く気づかず、美しく高みに立った言葉を「考え出せ」ば、乗り越えられると錯覚し、そういう人間になれたと思いつ込んでしまったのです。その後そういった言葉をことある毎に考え出し続け、吐き出し続けました。

そのため、実態と言葉の間がどんどん乖離していったのです。美しく高みに立った言葉の影で、実態の僕はどんどん置き去りにされていきました。内と外が合わなくなっていたのです。生活も物書きも何もかも二重になって、内と外をつじつまを合わせる調整のために、一時も休むことなく、内と外を行ったり来たりしてますます疲れ、制御が効かなくなり、バランスを失って、40歳を過ぎてから12年間の間、「鬱病」になったのです。

そのうつ病の僕の姿を見た弟が、珍しく静かな真顔で、「いつか、苦勞したヤツだけが報われる日が来ると思うけどな」と言ってくれましたが、閉ざしたアサリの殻の上からバターの味をしみこませるようなものだったのかもしれない。慰めにはなりませんでした。

「もどってくれ！と泣きじゃくる本心」というような本当の声音を押し殺して、気の利いた、カッコいいことを、一方的に投げつけて、ひとり逃げるように高みへ駆け上がって、上から見下そうとしたのです。そういう殻をかぶったのです。

あの時は、そうしてそれ以降も。

大覚大悟のちも、己のみが救われるのをよしとせず、同じように苦しむ、より多くの衆生（しゅじょう）を救わんがため、いや、それ以上に、自らが得た大覚大悟の真贋（しんが）ん）を確かめんがために、敢えて妻帯をし、唸りを上げる煩惱の大海に再び身を置いた親鸞さんのまねは出来なかったのです。真（まこと）を何も持っていなかったからです。

ただの高見の見物でした。清水の舞台から飛び降りずに、清水の舞台から眺めおろして、「みななもの、さても、ここまであがつてこれるかな？んっ？」と目をうつすら細めていただけだったのです。

今から見れば、「なんやねん、それ！張りぼてやんか？」ですが、つい最近まで、その「知らぬ間に誤動作する、こころのからくり」を、それが「だまし絵」だということにまるで気づけませんでした。親鸞さんとは全く以て、似て非なるものだったのです。お恥ずかしい限りです。

足下（あしもと）も見ずに、つま先立って無理に高みへ届こうとするような背伸びをやめて、地に足をつけること。身の丈になって正直に自分の実力をわきまえること。その実力のなさを認めて、受け入れること。たったそれだけのことが分からずに、それに気がつ

いて、再び歩き出すまで、多くの過ちや間違い、誤謬、誤認識を繰り返し続けていたのです。

今、思うと、その間、約40年。あの20歳の時から32年後、一旦はその過ちに気づき、鬱病から立ち直って少しはましな道を歩き始めたのですが、いつしかまた傲岸不遜の憑依魔物に取り付かれ、またぞろ同じ過ちを犯すようになり、そのことを今度は幾多のひとびとから気づかされて、もう一度それよりはいまま少しもな道に戻ったのは、ついひと月前のことです。

多分愚かな僕のことですから、またぞろ同じ過ちを三度（みたび）繰り返すことは、間違いのないことだと思っております。

おそらくこういったことを何度も何度も繰り返すこととは思いますが、そのたび毎に、今一度、更にもう一度と、落ちた溝から這い上がって、土、埃（ほこり）を払い落とし、襟を正して、再び元の道に戻ろうとする気力がどこまで続くか？

これはもう、行けるところまで行けるよう、やってみるしかないのかもしれないかもしれません。

（おしまい）